

エンパワーメント獲得のプロセス
～外国人散在地域A県在住ニューカマー既婚女性のライフストーリー～

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻
学籍番号 2016M30004 野口博子

要旨

本研究の目的は、外国人散在地域在住のニューカマー既婚女性のライフストーリー調査を通じて、彼らがどのようなプロセスを経てエンパワーメントを獲得したのか、また、そのプロセスにおいて遭遇するさまざまな困難と、その困難に対処するなかでどのような能力が開花され、作り出されてきたのかを明らかにすることである。

1990年の出入国管理及び難民認定法（入管法）の改定により、本研究のフィールドであるA県にも新たに来日したニューカマーと呼ばれる外国人が多く居住するようになった。彼らを支援するために、有志とともに、1996年に日本語学習支援や生活支援を主な活動とするボランティアグループを立ち上げた。現在日本語教室には留学生及び配偶者、国際結婚による外国人配偶者、日系人、研究者、英語教師、技能実習生などが参加している。この20年余の活動の中で、様々な相談に対応してきたが、特に既婚女性からの相談が多かった。言葉や文化の違いから起こる様々な問題に遭遇しやもう得ず帰国してしまう女性もいるなかで、困難を乗り越え、育児と仕事を両立しながらイキイキと自分の居場所を見つけ活躍しているニューカマー既婚女性たちがいる。筆者は彼らと接するなかで、彼らの生き方に強く感銘を受けた。そして、彼らがどのような思いで仕事と育児を両立してきたかを、明らかにしたいと思うようになった。

本研究の調査対象者は、筆者が主催するボランティアの日本語教室を通して長期に亘り関わりがあり、また育児と仕事を両立させているニューカマー既婚女性4名（Aさん：ペルー出身、Bさん：ベトナム出身、Cさん：ベトナム出身、Dさん：インド出身）である。彼らは現在も日本語教室に参加しているものや、夫の仕事の関係で転居したり、また、自身の仕事の関係等で教室に参加できない女性もいる。しかし、住まいを移してから、ことあるごとに近況を知らせてくれたり、時折逢ったりと、現在でも深い親交が続いている。また、長期に亘る付き合いで既に信頼関係を築いている間柄であるため、インタビューにおいて、深い心の内まで語ってくれることは明らかであることから調査対象者とした。

エンパワーメントとは、「相対的に剥奪されている資源へのアクセスの増加」である。そして、各資源へのアクセスは「気づき」に誘発される形で増加する。この「気づき」の誘発による異なるパワーの相互作用的獲得は、社会的・経済的・心理的・政治的という形態の異なるエンパワーメントの相乗的実現を意味している。また、個人が「社会組織」や「社会ネットワーク」、さらに「政治」や「外部エージェント」などの外部者との接点を多くもっていることから、エンパワーメントの実現には外部者の支援が非常に重要である（近田 2005）。

本研究においてエンパワーメント達成にはニューカマー既婚女性個人の心理的变化が重要だと考えられるので、フリードマンのモデルで「世帯（経済）」としている分析単位を、個人とした近田（2005）のモデルに準拠した新たなモデルを作成した。

分析方法として、調査対象者4名の語りから重要文脈を抽出し、新たに作成したモデルに基づき、4つのエンパワーメント（社会的・経済的・心理的・政治的）間の相互作用、8つの資源（社会ネットワーク・適正な情報・生存に費やす時間外の余剰時間・労働と生計を立てるための手段・

社会組織・知識と技術・仕事・防衛可能な生活空間)へのアクセスと心理的变化について、また、外部者の支援との関係についても明らかにした。さらに、言語の操作能力がエンパワーメントにどのような影響を及ぼしたのかも分析した。

分析は調査対象者の来日目的別と配偶者の国籍別で比較した。前者は就労で来日した場合と結婚による来日では、エンパワーメントにどのような共通点や違いがあるのか。また、後者は配偶者が同国人の場合と日本人の場合の共通点や違いについて分析した。分析するにあたっては、発達心理学や臨床心理学で有効な手段となるグラフを用いて行った。

分析の結果、4名それぞれ能力に特性があるなかで共通するものが抽出された。就労目的で来日している二人(Aさん・Bさん)に共通している点は、外部者主催(「外部者の支援」)の「社会組織(日本語教室等)」に参加し、日本語を習得(「知識と技術」)することにより心理的变化(『気づき』)が起こり、単純労働ではなく、日本語を使う「仕事」に対して主体的意欲が高まり『自信』に繋がっている点である。日本語という言語の操作能力習得により経済的エンパワーメントを獲得し、さらに心理的エンパワーメントを獲得している。Aさんは日本語の操作能力が工作上必要不可欠であるため習得できなければエンパワーメント獲得には至らなかった。Bさんについては日本語とベトナム語の二つの言語の操作能力そのものと、さらにコミュニケーション能力がエンパワーメント獲得の要因になっている。

結婚目的で来日している二人(Dさん・Dさん)に共通している点は、外部者主催(「外部者の支援」)の「社会組織(日本語教室等)」に参加し、「社会ネットワーク」を広げることによって、他者との関わりの中で(『気づき』)を誘発し、その過程で「仕事」という資源にアクセスできたことである。そのためには日本語の習得(「知識と技術」)が必要不可欠であった。Cさんは日本語の操作能力が自己実現として仕事に繋がっている点、また、Dさんについては日本語と英語の両方の操作能力とコミュニケーション能力がエンパワーメント獲得の重要な要素であることが明らかになった。

以上、来日目的や夫の国籍によってエンパワーメント獲得のプロセスはやや異なっているものの4名に共通している点は、日本語という言語の操作能力を習得していることである。次に共通するものは、「ニューカマー既婚女性の[ディス]エンパワーメント・モデル」の8つの資源のアクセス数に差があるものの、概ねアクセスできていることである。つまり仕事と育児が両立でき、社会的・経済的・心理的エンパワーメントを達成していることである。そしてエンパワーメント獲得には、佐藤(2005)や近田(2005)が述べているように、当時者の[気づき]と[外部者の支援]が大きな役割を果たしていること、[気づき]は資源へのアクセスを増加していくなかで誘発していることが明らかになった。

また、仕事を得ても現状に満足せず、スキルを向上させるために努力してきたことが、[自信]に繋がっている。得た自信は自己の存在価値の自覚に繋がっている。自己の存在価値を目指すためには他者との関係調整の中で自我を確立させることが必要不可欠であることから、周囲の人々との関係の中で調整を重ねてきたことが考えられる。

今後の課題としては、今回取り上げなかったディス・エンパワーメントのニューカマー既婚女性の実態を調査することが求められる。しかし、外国人散在地域は、集住地域とは異なり地方自治体は外国人政策を地域社会で取り組むべき問題として認識されておらず、日本語教室に関わる極一部の限られた人たちだけが認識し、ボランティアで対応しているのが現状である。そこで、これまで以上に行政や学校、また、企業、医療福祉などとも連携し、地域在住外国人の課題や実践知を言語化し、発信していくことが外国人政策に大きな影響があると考えられる。